

わかば会誌

東日本大震災特集号

わかば東日本大震災特集号によせて

河北郡市医師会会長 北谷 秀樹

その始まりは、待合室のテレビから漏れてくる一報でした。：「東北地方に大きな地震があったらしい。」：以来150日、ひと時の猶予も容赦もなく、現実はずり抜けています。ここに、改めて会員の皆様とともに、一万五千余名の尊い犠牲者を衷心より悼み、今なお不便な生活を余儀なくされている被災者の皆様に心よりのお見舞いを申し上げたいと存じます。

河北郡市医師会では、すぐさま被災地への連帯の意を表すため、会員の皆様の義援金をお呼びかけしましたところ、瞬く間に約300万円のご寄付を頂きました。ご厚志に、重ねて敬意を表します。これらの浄財は各地区の行政を通して日本赤十字社へ贈られました。各地区の行政を窓口としたのは、我々医師の活動は地域に密着したものであり、一朝事あるときには行政と一体となり、地域の住民の生命、健康を守る決意であることを示すためであります。

活動を行い、その存在感を示し、また、高田充彦先生は思い余り個人での出勤を果たしております。現地での生々しい実態は、本特集別稿にて示していただけの筈です。さらに、金沢医科大学会員の中からはDMATを始め、病院、所属学会単位での支援活動に多数赴いており、併せて敬意を表したいと存じます。

いま、日本丸という、少し古びてはいるが今なお勇姿を保つ船であった我が国は、『想定を超える』という嵐に遭遇し、乗客は傷つき、帆は傷み、発動機は故障しました。水夫たちは懸命に発動機を修理し、帆を繕っています。自らひどい火傷を負いながらも、船長や士官からの指令は、やれ西に向かえ、東に舵を切れ、やれ発動機を止めろ、速度を上げろ、と矢継ぎ早に伝声管から伝わって来ます。しかし、帆を膨らます風は一向に吹かず、発動機は今もどこからか煙を噴き続けているのです。それでも、水夫たちは、黙々と持ち場を離れず、目の前の仕事をこなします。たとえ、今のこの船の進路が最適であろうと、なかりとうと。何故なら水夫達は、今、船を動かせるのは船長や士官ではなく、自分たちであるこ

とを知っているからです。もし今、水夫たちが持ち場を離れたら、たちまち、船は漂流し渦に飲み込まれてしまうのだから。

これから、長く続く震災からの復興に向けて我々地区医師会の医師の役割はいかなるものでしょうか？ 本誌創刊号に載せた拙文を引用することをお許しく下さい。『世に病める人があるかぎり、その病と対峙し、病める人を包み込み、癒せるのは、私たち地域の前線にいる医師団の責務であるとともに、専有する天与の職であります。』：今、我々医師は、遭難した船の水夫のごとくであります。目の前の診療活動を通じ、肅々と地域の健康維持に寄与し、そして、これまでよりも少しばかり笑顔を増やし、国の力の底上げに寄与することが、震災からの復興、明日の日本への力になるものと信じております。会誌わかばの第2号のテーマとして、大震災を掲げた編集委員の皆様への慧眼に敬意を表します。



石川県医師会JMAT (第12班) 報告書

河北郡市医師会 副会長 由雄 裕之

4月28日

P M 3時、石川県医師会館にてこれまで2度福島に行かれていた村田さんより、現地の最新情報をお聞きし出発する。

P M 7時、新潟にて小森先生のチームと合流。
線量計：0.001mSv

4月29日

A M 6時、新潟を出発。

A M 9時30分、福島県相馬市の避難所「はまなす館」に到着。荷物をおろす。小森先生の案内ではまなす館を一回り。

A M 10時、これから私が担当する避難所「中村第一小学校体育館」と「中村第一中学校体育館」を訪問する。第一小学校担当の保健師太田さんにお話をうかがう。

P M 1時、コンビニで昼食。相馬市内8つの避難所を確認し、相馬市保健センターを訪問。はまなす館に戻り小森先生と打ち合わせ。はまなす館では1階ホールで地元演歌歌手や、パントマイムの公演が行われていた。

P M 2時、往診用機材を整え第一小学校から巡回診療を開始。昨晩冷え込んだためか、咳を訴える患者さんが多い。咳喘息と思われる症例あり。本日第1

線量計：0.004mSv

4月30日

A M 7時、福島市を出発。

A M 8時30分、相馬市保健センターで朝のミーティング。石川県JMATが紹介される。私は循環器内科医でポータブル心電図とポータブル心エコー2台 (Talus, Vscan) を持参している。紹介。早速、福島県立医大心のケアチームから不整脈を有する不眠の症例の精査を、静岡県JMATから入院を拒否し避難所に戻ってきた二段脈症例の精査を依頼される。

A M 9時30分、はまなす館で診療開始。心のケアチーム紹介の症例を診察する。頻脈性心房細動に僧帽弁逆流を伴い、うっ血性心不全を合併している。夜間の不眠は起座呼吸によるものと推測。アルコール依存もあり、本日まで未治療であった。地元の循環器科医による継続的な治療が必要と判断。その旨説明する。説明時は納得し感謝されるも、退出後「弟家族が津波で流されて自分ひとりが助かった。これ以上生きたくない」と保健師に受診を拒否。後は心のケアチームに託す。

P M 0時、被災地を見学。これまで繰り返し報道で見てきた光景だが、予想を超える激しさに言葉が出ない。

P M 2時、診察を再開。数名診察し、巡回診療に出かける。中村第一中学校では昨日の気管支喘息患者がやや悪化していたので処方内容を変更する。念のため心電図も確認。異常なし。安心さ

れる。夜間頻尿の患者は主訴をきつかけに話をされたいご様子。しばし雑談する。

P M 3時30分、中村第一小学校に移動。咳喘息と思われた患者は吸入薬の併用で改善。蜂窩織炎患者も改善を確認。仮設住宅への移動の準備をされている様子。本日は天候もよく多数の方が自宅の整理などで外出されている。

P M 4時30分、保健師の太田さんから、スタッフの健康状態が心配と相談を受ける。震災の日から一日も休みを取っていないと。つい忘れがちだが、職員も被災者なのだ。相馬市保健センターに移動し、二名の心臓検診をポータブル心電図と心エコーにて行う。

P M 5時、夕のミーティング開始。本日の活動を各チームが報告。歯科医師チームの健闘が光る。歯ブラシのあわない方、感染予防のため高濃度のイソジンガーグルでうがいをして口腔内が炎症している方、入れ歯を津波で流された方などに的確な処置をされている。保健センター所長より、仮設住宅に当選した4世帯が入居を辞退したと、本日入居したのがわずかに4世帯だったことが報告される。待ち望んだ仮設住宅だが、入居するとこれまでのコミュニティから断絶を迫られるよう。我々はいかに接すべきなのか、心のケアチームに明日のミーティングで解答をお願いする。

P M 8時福島市に戻る。
線量計：0.007mSv



相馬市保健センターでのミーティング

5月1日

AM7時、福島市を出発。

AM8時30分、朝のミーティング。静岡県JMATから不整脈を訴える症例の精査を依頼される。昨日の心房細動症例は心のケアチームの説得により、明日、姉と公立相馬総合病院を受診することになった。

AM9時30分、避難所「スポーツアリーナ」に往診。心電図・心エコーを施行。心室性期外収縮の散発のみ。自宅、親族、田畑を失い、避難所生活が40日を超えた。先の見通しも立たない。忍耐が限界に達しており、自己検脈で脈が抜けるとさらに不安になると訴える。心臓は大丈夫と太鼓判を押し、心のケアチームにバトンタッチする。静岡県JMATから耳痛と難聴の2症例の診察依頼あり。小森先生が往診される。はまなす館にサンプラザ中野が訪れ、

数曲歌いサイン会を行っていた。

PM0時、仮設住宅を見学。6月初旬に1000戸、7月初旬に追加500戸の完成を目指し急ピッチで建設しているとのこと。相馬市保健センターで静岡県JMATから心電図相談を受ける。静岡県JMATは本日メンバーが交代する。新旧メンバーと一緒に撮影する。ポータブル心エコーの評判が良い。

PM2時、中村第一中学校、中村第一小学校を巡回する。感冒症状の60台男性。OTCにて軽快しているが、まだお話ししたいご様子。漁船が流され職を失った。家族2人が亡くなり、1人がまだみつからない。毎日捜している。とにかく傾聴に徹する。処方なし。

PM5時、夕のミーティング。心のケアチームの慶応大学病院三村教授が接し方をお話しされる。天災被害での被災者の考え方、怒りのきっかけとその対象、今回仮設住宅抽選で起こったことなどを総論と各論にわけ、冷静かつ客観的に分析される。深い洞察力に感銘を受ける。

PM8時、福島市に戻る。

線量計：0.01mSv

5月2日

AM7時、福島市を出発。

AM8時30分、朝のミーティング。われわれは午後帰るため、ご挨拶。高い専門性と熱い情熱をもった方々と仕事を果たしたことに感謝。私も少しはお役に立てたでしょうか。岡和田所長、職

員のみなさん、一区切りついたらぜひ金沢へお越し下さい（小森会長が歓待されますよ。きっと）。

AM9時30分、中村第一中学校、中村第一小学校を巡回する。初日より診察を続けていた、気管支喘息の患者さんとお話しする。状態はかなり改善しているが定期的な加療が必要。避難所と市内の医療機関を結ぶ巡回バスを利用して、連休明けからはそちらに通っていただくようお勧めし、紹介状をわたす。震度4の余震あり。

AM11時30分、相馬市保健センターに出発のご挨拶。

PM10時、帰宅。
線量計：0.014mSv

最後に

押し売りのような突然の参加希望を快くお認めいただいた小森先生、現地でいろいろ教えてくださった小森医院のスタッフの皆様、感謝いたします。

私がJMATに参加すると聞いて、ポータブル心電計とポータブル心エコーを持っていくよう勧めてくれたフクダ電子の宮本さん、セントラルメディアカルの作田さん、ありがとうございました。

金沢医科大学病院の医療支援活動

金沢医科大学病院 救命救急科 和藤 幸弘

この度の東日本大地震に際し、多くの犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし、ご遺族に深くお悔み申し上げますとともに被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

本当に大変な災害が発生しました。当金沢医科大学病院の対応を図に示します。

3月11日地震発生の揺れを感じ、テレビの映像で被害の一部を確認して、DMAT派遣準備を開始、19時30分に小倉准教授以下5名のDMATが仙台に向けて出発しました。医科大DMA

Tは仙台医療センターと陸上自衛隊仙台駐屯地で活動し、3月14日に帰還。その後、7月までに避難所医療のため石川県健康福祉部からの要請、調整により医療救護班を第七次まで、石川県看護協会より災害支援ナース、石川県神経科精神科医会こころのケアチームに臨床心理士、精神科医を宮城県石巻市に派遣しました。

DMATは緊急派遣ではありませんが、能登半島地震の避難所医療の際に作成したリストをもとに薬剤部の方が備蓄更新を続けてくれており、大量の薬剤調達が瞬時にできました。大量に

金沢医科大学病院の医療支援活動

3/11	14:46	地震発生	
	16:11	厚生労働省よりDMAT派遣要請(仙台医療センターに参集)	
	19:30	金沢医科大学DMAT(医師2、看護師2、調整員1)出発 未明に被災地に到着。仙台医療センターおよび自衛隊仙台駐屯地で活動 日本DMAT解散。当院DMAT帰還。	
3/12 3/14		医療救護班(医師2、看護師2、薬剤師1、調整員1)	石川県心のケアチーム 臨床心理士(1)
3/29~4/1 3/31~4/6 4/4~4/7		一次	
4/9~4.12		二次	
4/23~4/26		三次	
4/26~4/30		四次	災害支援ナース(2)
5/15~5/21		五次(医師1、看護師1、薬剤師1、調整員1)	精神科医(1)
6/3~6/7		六次	
6/21~6/25		七次	
7/9~7/15			看護師(1)
7/27~7/31			

なったのは小生の怠慢で放置していたのが原因で、2回目以降の派遣から使用状況に応じて改訂スリム化しました。また、今回の避難所医療チームには薬剤師にも入っていたいただき、薬剤処方管理、服薬指導が確実となり、チームとしてのレベルが飛躍的に向上しました。

小生は日本集団災害医学会の仕事で被災1週間後に被災県庁、南三陸町などを視察してきましたが、93年に津波被害にあった奥尻島が果てしなく続く光景はまさに歴史を目撃したと感じました。

阪神大震災以来ようやく、道路確保の重要性が認識され、高速道路走行が

緊急車両に限られたこと、被災県庁対策本部に初めて医療が参画できたこと、日本DMATが全都道府県から計340チーム(約1500名)が参集し、花巻空港・福島空港にSCU(Staging Care Unit)が設営されて広域搬送が行われたことなど、進歩した部分もありました。しかし、青森県から千葉県まで甚大な被害が発生し、考えが及ばなかった様々な事態が噴出しました。ガソリンがない、物資・食糧が補給されない、この国で御遺体を土葬しなければならぬ事態だけでも、想像を絶する大変なことが起きたことがわかると思います。

南海地震と東海・東南海地震が連動したことはこれまでに数回あり、現在もスーパー広域災害として準備が進められています。しかし、東北、東日本では「想定外」でした。日本の文字で記録された歴史は1500年程度のことであり、国土の歴史からみると一瞬のことかもしれません。自然の前には「想定」などあり得ず、謙虚になるしかないと感じました。

まだまだこれからも医療支援が必要です。我々も献身を惜しまず、早く復興できること、喪失の悲しみが癒えることをお祈りします。

石川県こころのケアチーム活動報告

石川県立高松病院

石井 了恵

石巻市に向けて

「石川こころのケアチーム」第1班は3月16日〜22日まで石巻市で支援にあたった。

診察時の主な症状

睡眠障害、強い不安及び抑うつ気分の方が多く、また、認知症高齢者の中には環境の変化に伴い夜間せん妄等の症状悪化を招く方もいた。児童では、子供返りや疲弊しているのに妙に頑張ったり、大人の顔色を伺って模範的な子どもでいようとする方もいた。しかし、実際には精神的なことばかりではなく便秘や脱水、風邪・栄養不足からくると思われる口内炎や筋肉の引きつりを訴える方やインフルエンザ、ノロウイルスなどの感染症の方も出始め、期間中124名に処方した。また、こころの診療所待合室で高齢の方が、突然呼吸停止して緊急蘇生と救急車の要請を行なったこともあった。

処方の際には「精神科の薬」という抵抗感を軽減するよう、薬の用法を薬袋に書いて渡すこと、食事が不定期なので食後に服用という言葉は避け、慎重にかつ詳細に説明することを心がけ

終わりに

我々が現地でおこなった支援で最も効果があったのは「へえー石川県。遠いところからよく来てくれたねえ」と被災者の方々からよく言われたが、「遠いところから、これからも続々と支援に参ります。日本中が見捨てません。」という意思表示が地元の人たち自らの力を奮い立たせるのかもしれない。

最後に、あの惨劇と人々の生き様と悲しみを心に刻むと共に、一日も速く復興していくよう思いをはせるばかりである。

石川県立高松病院

木谷 知一

私は平成23年4月15日から4月21日の7日間、宮城県石巻市にて、石川県こころのケアチーム第7班に参加しましたので、その活動内容を報告します。私たちの活動時期は3月11日の地震発生から1ヶ月がたち、避難所生活が長期化している時期でした。そのような状況で、精神面で不安定になる被災者への適切な介入、特に治療が必要な方

に対し、地元医療機関へ紹介する役割が求められました。具体的な活動内容としては、避難所での巡回診療、ケースとして拳がった介入が必要な被災者の診察、被災者宅への戸別訪問がありました。

震災後1ヶ月を経過しても、石巻市の甚大な被害の跡は、至るところに残されていました。特に、被害の目立った海岸沿いは、辺り一面、がれきの山が広がっており、この光景を目の当たりにした時には、自分の感情が不安定になるのを感じ、果たして自分自身、適切な活動ができるものか不安を感じざるをえませんでした。

避難所での活動については、比較的機能が残った地域の避難所と壊滅的であった地域の避難所とは状況が異なりました。前者においては、学校の教室で避難生活していた方が、学校の再開に伴い、体育館への移動を余儀なくされるという時期で、長期化している避難所生活に、さらにストレスが加わっている状況でした。そのような中で不眠や不安を訴える方が多数おられました。後者の壊滅的であった地域の避難所については、未だ周囲から孤立し、救援物資も不十分なところもあり、このケア以前に行政及び政治的な解決が必要なのではないかと感じました。

さらに、これらの避難所生活を希望されず、不安を抱えながら自宅での生活を続けている方が多数いることが、戸別訪問を通し実感されました。ある

方は、アパートの2階に住んでいましたが、一階部分は津波による被害で、構造がむき出しでした。また別のある方は、地震当時、津波で自宅一階が完全に浸水し、備えのない2階で4日間孤独に過ごしたとおっしゃっていました。周囲の平屋建てにお住まいのご友人は、皆さん亡くなられたと話をされていきました。

名取市避難所での医療ボランティアの経験

宇野気医院 高田 充彦

3月11日(金)に東日本大震災・津波が発生し、たいへん悲惨な被災地現場の状況や画像が次々と報道につれ、なにか少しでも被災者の役にたてることがないか、考え始めました。DMAT(災害派遣医療チーム)専門チームがすでに派遣されていました。災害医療の経験もない開業医が女房と二人だけで行くとなると、自力で個人的に行くしか方法がないように思われました。医師会のJMAT(日本医師会災害派遣医療チーム)に加われないか問い合わせましたが、医師、看護師、事務職のチーム構成が必要ということでした。さて問題は交通網、道路事情の情報で、おおかたの意見では現場に行けないし、行ったとしても給油は全く不可能で、戻れなくなりかえって迷惑

今回の活動を振り返ってみると、適切に地元の医療機関に繋げることができたケースもあった反面、行政機能も十分でない中で、保健師との連携が不十分であったことや特に被害が甚大であった地域において、介入が必要なケースが十分拳がってきていないのではないかと印象もあり、今後の検討の必要があると思われました。

となるので、行かない方が良い。というものでした。

高速道路の復旧は、各方面の活躍で、比較的早期に通行できるようになっていくようでしたが、許可書を持った緊急車両しか通行できず一般車両への許可書発給がなかなか難しいようでした。こちらでの情報では地震の障害で一般道では行けないとのことでした。そうこうしているうちに、女房の知り合いから、金沢から出発している、炊き出しボランティアグループの情報が入りました。その方にたのむと携帯メールで詳しく情報を送って下さって、今度も一般道路で仙台市や石巻市方面へ3月19日(土)に出発するといふのです。



館腰小学校の自衛隊キャンプ

(土)の診療終了後、インターネットで現地情報を調べたり、資材調達などの出発準備にかけたり、3月20日(日)の午前中に、役にたちそうな薬品や、医療資材と赤ちゃん用ミルクや紙おむつ、2人分の水、食料、簡易トイレなどを積んで出発しました。ガソリンは新潟県以北で給油制限がありました。新潟県胎内市で2カ所のガソリンスタンドをまわって満タンにし、国道113号線経由で仙台市方面に向かいました。途中トイレの心配もあって、山形県高島町のコンビニエンスストアの駐車場で車中泊しました。

名取市は宮城県南部に位置し、仙台市の南東に隣接する人口約73000人の都市です。閉上(ゆりあげ)、北釜地区を中心に沿岸部で津波被害が著しく、多くの死傷者(6月時点で死亡判明912名)を出しています。

3月21日(月)春分の日の朝、名取市ではコンビニ始めほとんど全ての商店は閉鎖しており、開店できる数カ所のみガソリンスタンドに給油待ちの列が何キロにもわたって続いていました。遺体安置所の案内看板も見えませんでした。午前7時頃名取市役所に到着。

市役所玄関には死亡判明者リストの紙が何枚も張っており、多くの方が見入っていました。市役所に入ると、休日の朝にもかかわらず、多くの職員が詰めていて、行方不明者の問い合わせと思われる電話が絶え間なくかかっていました。医師免許証のコピーを提出し、「少しでも何かお役に立ちたいと思って、葉など持参で石川県から来ました。何かできることはないでしょうか？」と医療ボランティアの申し込みをしましたところ、どこの部署で取り扱うかしばらく問題になったようでした。結局、保健センターに行ってくださいということになり、保健センターの所長さんが名取市医師会長に電話してくださり、避難所で医療ボランティアをしてもよいということになりました。

午前中は館腰小学校、午後は名取市文化会館におうかがいしました。それぞれ300人〜500人の方が避難生活されているとのことでした。館腰小学校では体育館と各教室に分かれて、多くの方が収容されており、体育館では一大家族が畳2〜3畳くらい、段ボールで簡単な囲みがあり、横になって寝るだけのスペースしかない有様でした。うつつすらと吹雪が舞う寒い日だったので、暖房も灯油ストーブがあるだけの中で大人の人たちは疲れ切ったようにみえました。しかし子供たちは元気に友達同士外でとび回って遊んでおり、救われるような光景でした。小さな男の子が自分で作った自慢の紙飛行機を私にくれました。幸いこの地区では電気や上下水道は復旧しており、水洗トイレが使用可能のようでした。仮設トイレは残っており、最近まで使われていたようでした。市の保健婦さんを始めとする職員や、養護教員・教師の方々が詰めておられ、不休で働いていらっしやるようでした。食料などの支援物資は不足していないとのことでした。自衛隊のキャンプが校庭に設置されていました。市内の医療機関の3分の1ほどが地震津波被害で診療できなくなったとのことでした。診療体制は、残りの医療機関および、病院スタッフがチームを組んで、スケジュールを決めて、各避難所を巡回、調剤薬局も機能しているようでした。また、外来受診のために市の巡回バスが各病院などへ送迎していました。

当日は春分の日でしたので、救急以外の外来がなく、巡回する医師も少ない日でしたので、何とかお役に立つことができました。インフルエンザなど感染症患者さんも出ているが、集団感染にまで至っていないとのことでした。

午前の館腰小学校では最初に、体育館で拡声器にて「小児科医です、健康に問題のある方は申し出て下さい。診

療します。」と呼びかけていただき、それぞれの場所に巡回しました。校舎の方では保健室で診療させていただきました。20数名の方が受診され、ほとんどが咳嗽、鼻症状や、下痢、湿疹など軽症でした。薬の調剤も女房と2人で行いました。散剤を薬包紙の手折りで分包しましたが、分包機のありがたさをつくづく思い知らされました。

午後、文化会館では、「小児科医ですが、簡単な内科疾患も診させていただきます。」と放送していただき、成人の血圧なども測定させていただいたりしました。糖尿病・高血圧でかかりつけ医にみてもらっていたが、通院していた病院も含め、地域全体が津波で流されてしまい、どんな薬を服用していたか分からない、応急的に薬を処方してもらったが不安だといった方もいました。ゆっくり話を聞いてあげたかったのですが、ホールの渡り廊下のテラスのようところで、簡易机と折りたたみ椅子に、列をつくっての診療で「体の状態は安定していますよ」といつてあげられるだけでした。また風邪の3ヶ月の赤ちゃんを抱いたお母さんは顔色も悪く精神的にもつらそうでした。

した。次に畳敷きの部屋に部落単位で数家族が過ごされている所へ呼ばれ、男性が40℃の高熱で、ガタガタ震えていました。他にも感冒症状の人がいるようで「あつ、インフルエンザかもしれない」と緊張した瞬間、運良く社会保険病院の巡回医療チームが4名で訪れ、直ちに患者さんを隔離していただくことができました。ちょうど午後3時を回っていましたので「あとをよろしくお願いします。」と帰路につくことができました。

金沢まで、約9時間かかり、午前0時少し回った頃に自宅に戻れました。持ち出した医薬品・医療器具の後片付けに時間がかかり、眠れたのは午前3時過ぎでした。時間の余裕がなく、1日だけのボランティアでしたが行かなくて、後悔するより、行けるときに行ってよかったです。

不幸にも震災・津波で亡くなられた人々のご冥福をお祈りします。3ヶ月以上たった今でも避難生活を続けていらっしゃる方が多いと聞きます。地域がはやく復興され、すべての人が落ち着いた生活に戻れますように、切に願ってやみません。

東日本大震災における眼科関連の活動紹介

たなべ眼科医院 田辺 久芳

東日本大震災では多くの人々が被災

し、数万人の方が亡くなられました。

亡くなられた方々に深い哀悼の意を捧げますとともに、被災されました多くの方々に対し心よりお見舞い申し上げます。

今回の大震災では各地の医療機関に大きな被害が発生しましたが、眼科においても宮城県石巻市の眼科医師が亡くなり、病院の眼科部門や眼科診療所が壊滅的な被害を受けたところも多数ありました。震災後早期に、被災各県の大学病院眼科が中心となり眼科医会と協力して巡回診療を開始し、眼科医のいなくなった地域や避難所に向きましました。津波を逃れるための身着のまま避難したので薬を持ち出せず、緑内障や糖尿病網膜症などの慢性疾患の悪化を来している被災者が多くいるのではと心配されましたが、実際緑内障の点眼中断による眼圧上昇、膠原病にてステロイド内服中の方の緑内障、網膜動脈瘤による眼底出血、糖尿病網膜症の悪化による硝子体出血を来していた方が発見されたとのことでした。



移動式眼科診療バス (Vision Van)

また眼鏡を津波で流され非常に不自由している方や、コンタクトレンズの保存ケースや洗浄液が無くなり何日もコンタクトレンズをつけてばなしでいたため角膜障害を生じている方も多くいたとのことでしたが、各種眼鏡、点眼薬、一日使い捨てタイプのコンタクトレンズ等が各業界から提供され、被災者の方に配られました。眼科医療においては高度検査機器が必須ですが、これらを積載した移動式眼科診療バス (Vision Van) がアメリカのマイアミ大学より提供されました (6年前のハリケーン・カトリーナでも大活躍したとのこと)。大きくて重過ぎるため自衛隊や米軍では輸送できないとのことでしたが、ロシアの会社がアントノフ輸送機を使って仙台空港まで無償で Vision Van を空輸してくれることになりました。巡回診療に使用することが出来た病院や医療機関も仮設診療所を建設する動きが出ているとのこと、被災地の医療環境は改善してきています。被災地の眼科医療再建のため、日本眼科学会と日本眼科医会が会員から義援金を募っています。私は小さな診療所の一医師ですが、全国の眼科医が力を合わせれば被災地の眼科医療の再建は可能だと考えます。眼科は命にかかわる科ではありませんが、患者さんのQOLを向上させるため出来る限りの活動を行っています。どうか皆様のご理解をお願い申し上げます。

東日本大震災で思ったこと

紺谷医院

紺谷 一浩

本年3月に起きた東日本大震災により、お亡くなりになられた多くの方々のご冥福をお祈りすると共に、被災された皆様方に対し心よりお見舞いを申し上げます。地震そしてそれに続く津波は平安時代に起こった津波が仙台近くまで達したという歴史に残る貞観の地震に匹敵する規模だったようです。東北の海岸沿いの町並みはその原型をとどめぬような無残な姿になってしまいました。今回の地震津波で約2万7000人をこえる死亡者行方不明者がいたと報道されています。地震直後に現地入りをした方々は恐ろしい現実をみたようです。テレビではけつして映らないそして私たちがみているものを、現地の人や救助隊の人は日々目にしていたのです。救急医療のプロといわれる先生でさえ「現場で涙を流した。今まで多くの修羅場をくぐってきたが今回は心は一度折れた。そのくらい辛かったが気持ちを切り替えて又、行きたい」と話されていたのが印象的でした。震災そうそう現場で検死活動をおこなわれた医師の方

が、体育館で並べられた子供を含めた多くの遺体を前に絶句しながら検死する様子など、また海に沈んでいる助けたくても助けられないたくさんの方の遺体など、直視できる状況ではなかったようです。同じ日本に住みながら、このような惨事に遭われた人々に我々は最大限の応援をすべきではないかと感じた次第です。私の家は木津の海岸から徒歩10分くらいの場所に建っています。もしも津波が起これば真っ先に流されてしまうのではという恐れを持ちました。しかし昔からこの地での地震による津波等の被害の話は聞いておりません。町の長老は、この町は絶対大丈夫なんだと太鼓判をおしていました(?)。しかしこの細長い日本列島は世界で一番の地震多発地帯といわれています。マスコミによれば、近い将来、今回と同じような規模の地震が東海地方で起こり、首都圏を直撃すると予想されています。医師会でも災害訓練などおりにふれて行っていますが、あまりにも実態とかけ離れた訓練になっています。地震、災害を想定して、そして非常に危険な原子力発電所が起こす問題等にどんなふうに対処すべきか、今一度考えなければならぬのではないのでしょうか。そして被災された人々のためにも、多くの日本人のためにも

一刻も早く東北が再生し、日本が立ち直る事を期待する次第です。

きた眼科クリニック 北 勝利

3月11日の東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。またご遺族の方々に深くお悔やみ申し上げます。被災された皆様にご心からお見舞いを申し上げますと共に、皆様の一日も早い復興を心から願っております。

被災されながらも地元の医師の方々、日赤の医療チームや日本医師会のJMATのジェネラリストの方々が献身的に被災者のための急性期医療を行っている姿をみて心が熱くなりました。このような状況の中で、スペシャリストである眼科医がどのように被災地の眼科医療を提供、復興および正常化に取り組んでおられるかを、宮城県眼科医会報「震災特別号」を読んで知ることができました。宮城県眼科医会を中心になり、東北大学（関連病院を含む）、同窓会が参加し、さらに日本眼科医会、日本眼科学会、日本視能訓練士協会、全国の医療機関、日本眼科医療機器協会、種々のメーカーおよびディーラーの協力を得て、コンタクトレンズ部門、薬剤部門、眼鏡部門、医療機器部門および被災地支援部門にわけて活動を開始したとのこと。自

らも被災されながら、直後から被災者への眼科医療の提供のために懸命な努力をされている被災地の先生方の姿を知り、感銘を受けました。

政治について全く詳しくは無い私ですが、被災された方々が毎日毎日懸命に復興のために努力され、被災地の医療機関も日本全国の関係機関の協力を自主的に得ながら懸命に復興に取り組んでいることを知るほどに、日本の政治が一日も早く一丸となって復興に向けて全力を挙げてくれることを願います。

被災された方々および被災地の医療の一日も早い復興を心より願っておりますので、私たちにできることがあれば、可能な限り支援をしたいという気持ちでいっぱいです。

いこま眼科医院 生駒 尚秀

3月11日に発生しました東日本大震災におきましては、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の方々に対し心からお見舞い申し上げます。

現在、発生より3ヶ月が経過しておりますが、医療の面では全国から応援にかけつけた医療チームの撤退後の現地の医師の人材確保が課題になっていきます。設立された被災者健康支援連絡協議会により長期派遣に応じられる医

師を募集することにより、同じ医師にずっと診てもらいたい患者の希望がかなえられればよいと思います。また災害拠点病院の建物の耐震性、食料や医療品の備蓄、災害派遣医療チームが病院の被災状況を把握するのに役立つ広域災害救急医療情報システムの利用状況など、想定される災害の大きさを踏まえたうえで再検証が必要であることがわかりました。

ところで今回の震災では非難時のパニックは少なく秩序が保たれていたことには驚かされました。被災者の人々が示したすばらしい秩序と相互扶助が世界から注目を浴び驚嘆させました。現場での献身的な助け合いがあった半面、安全な場所にいる人たちのベットのボトル水の買い占めパニックなど安心が人本来の姿を失わせているのでしょうか。

最後に被災者の心についてですが、孤独の中で感情に飲み込まれてしまわないよう共に怒り、共に泣き、寄り添



い、心と地域の復興をいっしょに目指す姿勢が必要であると教えられました。また被災者以外の人たちは被災者を弱者とだけ見なして援助するのではなく、復興過程で自分が助けてもらう癒しと、自分も誰かを助ける活躍の体験が問題の解決と外傷後成長をもたらすことなど、この現実を通して人が本来持っている相互扶助、感情を共有する心の尊さについて考えさせられました。

編集後記

お忙しい中、ご寄稿頂いた金沢医科大学病院救命救急科の和藤幸弘先生、高松病院の石井了恵先生、木谷知一先生に深謝いたします。A会員の中からは由雄先生、高田先生が被災地に赴かれた貴重な体験をレポート頂き、田辺先生からは眼科領域の活動をご紹介いただきました。また、震災に対する思いをお願いしましたところ、紺

谷先生、北先生、生駒先生から貴重なご寄稿を頂きました。皆様に、編集委員会からのご寄稿依頼の非礼をお詫びし、御礼を申し上げます。ポランテアで現地に赴かれた多くの方々に拜見して、「東北をなんとかしたい、日本をなんとかしたい」というまっすぐな思いと、改めて日本、世界の絆の大切さを感じました。

編集委員：紺井一郎、宮崎 巨、石倉直敬

由雄裕之、山崎芳文、沖野惣一